

22その後、イエスは弟子たちとユダヤ地方に行つて、そこに一緒に滞在し、洗礼を授けておられた。23他方、ヨハネは、サリムの近くのアイノンで洗礼を授けていた。そこは水が豊かであつたからである。人々は来て、洗礼を受けていた。24ヨハネはまだ投獄されていなかったのである。

25ところがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人との間で、清めのことと論争が起つた。26彼らはヨハネのもとに来て言った。「ラビ、ヨルダン川の向こう側であなたと一緒にいた人、あなたが証しされたあの人が、洗礼を授けています。みんながあの人の方へ行つています。」27ヨハネは答えて言った。「天から与えられなければ、人は何も受けることができない。28わたしは、『自分はメシアではない』と言ひ、『自分はあの方の前に遭わされた者だ』と言つたが、そのことについては、あなたたち自身が証ししてくれる。29花嫁を迎えるのは花婿だ。花婿の介添え人はそばに立つて耳を傾け、花婿の音が聞こえる」と大いに喜ぶ。だから、わたしは喜びで満たされている。30あの方は栄え(大きくなり)、わたしは衰えねば(小さくならねば)ならない。」

新共同訳聖書、30節の洗礼者ヨハネによる言葉は、「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」を直訳すると「彼は大きくなり、わたしは小さくならなければなりません」です。洗礼者ヨハネは、「小さくならねばならない、」

という言葉は、ヘブライ書2章6節以下で

「あなたが心に留められる人間とは、何者なのか。また、あなたが顧みられる人の子とは、何者なのか。あなたは彼を天使たちよりも、わずかの間、低い者(小さい者)とされたが、栄光と栄誉の冠を授け、すべてのものを、その足の下に従わせられました。」

つまり「小さい者」というのは、神との対比において人間そのものを言い表すのです。そこで30節の洗礼者ヨハネの言葉を意識すると、

「キリストは神としての存在に近づいていかれるが、わたしはあくまでも人間として生き抜いていかなければならない。」

このおなじ言葉が、1516年に描かれた祭壇画に書き込まれているのです。週報にも掲載したクリューネバルトのイーゼンハイム祭壇画は、キリスト教の絵画のうちでもよく知られているものでしょう。

真ん中に十字架につけられたイエスが首をうなだれている。その下に小羊がいます。左に母マリアとマグダラのマリア、その傍らにヨハネがいます。二人のマリアはイエスを見上げている。右側には洗礼者ヨハネが右の人差し指でイエスを指して、左に書物を携えています。

この洗礼者ヨハネの右肩に「彼は大きくなり、わたしは小さくならねばならない」と言葉が書き込まれているのです。十字架のイエスと二人のマリアは、ヨハネ福音

書の終わり部分とはじめの3章がいつしよに描かれているのです。つまりクリューネバルトは、3章を読むときに19章を、19章を読むときに3章を読むように導いているのです。

それに加えて大事なことがあります。ずいぶん昔のことですが、とても不可解に感じたことを思い出しました。それは、十字架上のイエスの体中に斑点があるのです。おそらくペストか何かの病気のゆえなのです。イエスは何らかの病を負う者として十字架につけられているのです。

画の両扉には左に、ペスト患者の守護聖人セバステリアヌス、右には(麦に入り込む真菌によりライ麦などから人間に張り込む病気で、壊疽で足などが崩れ落ちる)麦角病の右守護聖人アントニウスが描かれています。この祭壇画はアントニウス会修道会の施療院にこの構図は守護聖人が傍らにいるにもかかわらずイエスは病を負つて十字架につけられ、母マリアとマグダラのマリアが嘆き悲しみ胸が引き裂かれる思いで見守る中で、死して行かれるのです。

さらにこの祭壇画は、三つの場面から構成されており、病に罹つたひとたちの施術のために用いられたよう、この画を見ながら薬草の入ったワインを飲み、パンを食するなどし、守護聖人に祈りを献げたのです。今から500年以上前の医療事情を想像してみると、施術のためにやってくる病を負つたひとたちの、いったいどれだけが回復したのでしょうか。14世紀から19世紀まで三度のパンデミックをもたらしたペストは、ヨーロッパの全人口の1/4〜1/3、2千5百万人が亡くなったといわれます。(抗菌薬による治療がない場合、腺ペストでの致死率は30%) 3〜4人に

一人の人が病に倒れて死にゆく社会、そんな生死が身近な社会の状況においてこの祭壇画を描いたクリューネバルトは、いったい何を考えてこの画を制作したのでしょうか。いろんな方がHPに写真を掲載して「どうしてこんなに残酷な画を描くのだろう」というようなコメントを付しています。

その問いは今ここでは、同時に「この凄惨な画に神の救いはあるのだろうか」という問いになるのです。病に冒された者にとっては、病から回復することが救いであることに間違いありません。健康な者にとっては病に罹らないことが、神の守りなのです。

しかし祭壇画のイエスは病に冒されたまま、守護聖人さえもなすすべもなく、十字架において死を遂げられるのです。施療院にやって来たひとたちは、この画を見て病が治されることを祈願し、薬草入りのワインとパンを食しました。奇跡的に回復したひとたちは、神を賛美し、神の救いに歓喜、感謝したことでしょう。ただ、早晚この画と修道院内の施療院で過ごした日々を過去の記憶に留め置くだけでよい。

しかし、守護聖人への祈りも虚しく、パンもワインも何の効果ももたらさず、病が回復する兆しもない、ただただ、苦しみが増して死が近づいてくる病のひとが、この画を見るとき、どうでしょうか？

わたしは神の選び、守り、恵みから漏れた者、わたしは神から見捨てられ、その救いの手から漏れ落ちた者だといふ絶望の深淵で、項垂れるしかないのでしょうか？ほんと

うに希望はないのでしょうか？

こう理解するひとがいないでしょうか？…イエスの十字架は、紛れもなく、わたし自身である、今まで教会が繰り返し唱えるありがたい信条、あるいは他の可哀なひとたちの救いだっただ、あの十字架が、自分の救いとして分かるのでしょうか。

「わたしはひとりではない。神が共にいて下さるのだ、」と。そして暗黒の中で絶望を経験した者だけに与えられる恵みに与るのです。絶望はもはや存在しない、残されたものは？



